

科学研究費助成事業（特別推進研究）中間評価

課題番号	20H05617	研究期間	令和2(2020)年度 ～令和6(2024)年度
研究課題名	アジアと欧米：コミュニケーションの文化差から言語の獲得過程を探る	研究代表者 (所属・職) (令和4年3月現在)	馬塚 れい子 (国立研究開発法人理化学研究所・脳神経科学研究センター・チームリーダー)

【令和4(2022)年度 中間評価結果】

評価	評価基準
A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、欧米とアジアの乳児期の言語習得において時間差が生じる要因について、母子コミュニケーションの文化差に注目し、言語の獲得過程に関する比較研究を行うものである。具体的には乳児の音韻、語彙、語順の発達過程を欧米・アジア6か国で比較実験を実施することにより、乳児の語彙発達が母子コミュニケーションによって促進され、音韻の発達にも影響することを検証する。</p>	
<p>(意見等)</p> <p>新型コロナウイルス感染症の拡大のため、また特に対象が乳児であることから、実験の実施において大幅な遅延を余儀なくされた。しかし、乳幼児がマスクを着けて話す大人から語彙を学ぶ影響を調べる実験などの工夫や、既存の実験データを用いた解析など、柔軟な対応がなされ、新たな知見も得られた。研究実施上の厳しい制約条件にもかかわらず、ある程度の研究の進展が見られたと評価する。</p> <p>一方で、そこで得られた各研究結果が研究全体の目的とどのように関連しているかが明確ではなかった。このため、今後はこの点を明確にするとともに、これまでの実験の実施の遅れを回復することを強く望みたい。また、これまでの実施期間中に得た知見も活用し、母子コミュニケーションの影響に関する仮説を検証することにより、言語の獲得過程における社会的文化的要因の役割について研究の更なる前進を期待する。</p>	